

邪神に転生したら配下の魔王軍が
さっそく滅亡しそうなんだが、
どうすればいいんだろうか3

キリック

亀氏族を率いる魔王。
老齢だが、戦いに対する
情熱は衰えていない。

ガーフィンケル

世界の創造にも関わった
〈知恵者の神〉。
ヒラノの動きを
気にしている様子。

ロ・ドゥルガン

かつては傭兵連隊を
率いていたが、
ドラクゥの配下となる。
戦の腕は一流。

クオン

ドラクゥの配下で元商人。
見聞の広さは多くの者が
一目を置いている。

フィルモウ

妖鳥属の魔王で、
通称〈一日千里〉。
野心の強さを
隠そうともしない文官。

ドラクゥ

大魔王の血を引く者。
辺境のアルナハより、
魔界に覇を唱えようとしている。

平乃凡太

元サラリーマン。
異世界に転生して、
ドラクゥの邪神「ヒラノ」となる。

エリィナ

ドラクゥの義妹で、
邪神官を務める。
素直で純真。

慶永佐織

ヒラノの高校の先輩。
異世界ですでに
神をしていた。

						目次
第一章	塩の柱	7				
第二章	方舟 <small>はこぶね</small>	58				
第三章	ダークエルフ	111				
第四章	大会議	158				
第五章	泥沼の戦場	190				
第六章	代償	223				



第一章 塩の柱

▽▽▽【魔王】

巨大、と言うより他ない。

大魔王府からやって来た老人は、ドラクウよりも頭三つほど大きかった。オーク族である。禿頭に床まで届く長いひげ。〈白髯〉のダーモルトと言えば、魔界で知らぬ者のない老臣だった。

「久しいな、——爺」

「ご無沙汰しております、ドラクウ殿」

様付けでも、主上でもない。ダーモルトのドラクウに対する呼びかけは、あくまでも「ドラクウ殿」であった。既に顕職から退いているが、ダーモルトは未だ大魔王府の所属であり、ドラクウをその主として認めていないからだ。

アルナハ政庁の謁見の間で対峙する二人の立ち位置は、対等だった。

お互いに、立ったままで相手を直視している。

大魔王府からの「勅使」を迎える魔王は、本来下座に就かねばならない。だが、ドラクウは既に

大魔王へ即位することを内外に公表している。

大魔王の名代と、大魔王を名乗る者。

本来であれば、同時に存立することのない立場の二人。故にその関係は、自然と同等にならざるを得ない。

「ラコイトは——〈白髪姫〉は壮健か」

「ドラクウ殿に気にかけていただいて曾孫も喜ぶでしょう。今は大魔王府で〈北の霸王〉との連絡係のようなことをやっております」

ドラクウの不倶戴天の敵である〈北の霸王〉ザーデিশユの腹心——ラコイトは、このダーモルト翁の實の曾孫にあたる。その巨軀に似合わず調整型の優れた官吏であるダーモルトの血を、最も色濃く受け継いでいるのが、〈白髪姫〉ラコイトだった。

「ザーデিশユ、な。あの老人もいつまで権力に固執するのか」

「はは、耳が痛うございますな」

「爺、そなたのことを言ったのではない。〈北の霸王〉のことを言ったのだ」

ドラクウ即位の報は、魔界全土に広まっている。

辺境のアルナハは、瞬く間に人々の話題の中心となった。これまで位置すら知られていなかったような城市に無数の使節、密偵、そして商人たちが詰めかけている。今では城市を取り巻く陶壁の周囲にも市が立ち、宿泊用の天幕が軒を連ねていた。

既に〈北の霸王〉も、いくつもの手を打ってきている。その一つが、ドラクウと近い間柄で

あつたダーモルトの派遣だ。

〈北の霸王〉は、大魔王に次ぐ地位である四天王の一人にして、その筆頭だった。ダーモルトの真意はともかく、彼を動かすことも容易い。

「……爺、そなたは余の大魔王就任を言祝ぐつもりはないのだな」

「そうは申しません。ドラクウ殿は正しく大魔王の系譜に連なる御方。手順を踏みさえしていただければ、魔界において何人も侵すこと能わざる至尊の位に就くことに何も含むところはございません」

「大魔王府の司る儀式を経なければ大魔王には即位できない、というわけだな」

「天神地祇と社稷とを祀り、遍く魔界にその御稜威を広められる御方である大魔王に就くためには、盤古より定められた儀式をこなしていただくのが定めでございます」

恭しく頭を下げてみせながら、顔を上げたダーモルトの目は笑っていない。つまり、まだ時期が早いと、この老爺はドラクウを窺っているのだ。

ドラクウ率いるアルナハ陣営の兵士は、驚くべき勢いで増えている。近隣の小豪族が、ドラクウに帰順を申し入れてきているのだ。魔王の中にも、ドラクウに秋波を送る者は少なからずいる。それらの中から、本当に信用に足る者だけを選び分ける形で、ドラクウは陣営の強化を急いでいた。

数だけなら、今すぐにでも一万は十分に集められる。配下のラ・バナンの見立てでは、無理をすれば、もう五〇〇〇用意することも不可能ではないという。そして、それはこれからも増えていくだろう。

落ち延びてきたときの兵力二〇〇から考えると大きな進歩だが、まだ一万しかないのだという気持ちも強い。

倒すべき〈北の霸王〉は、最大で二十四万の兵を動員できる。これはほぼ間違いない数字だった。以前、〈廃太子〉ドラクウとの決戦に動員した数なのだ。状況によつては、この数はさらに増える可能性もあった。戦術で覆すことのできる数ではない。

ダーモルトは、それを訴えている。

今、ドラクウが大魔王に即位したと正式に宣言すれば、大魔王府はそれを「僭称」と見做さなければならぬ。そうなれば〈北の霸王〉も、彼の下で働く〈白髪姫〉も、近隣の魔王にドラクウ討伐を依頼する使者を嬉々として送るだろう。

その愚を避ける、という忠告は、ドラクウにとつても理解できることだ。

せめて、大魔王府の中にもう少し味方を作る、あるいは〈北の霸王〉の後背を脅かす同盟者を手に入れるまで待てないのか、という思いはドラクウも共有していた。だが――

「儀式は簡素に執りおこなう。累代の大魔王には申し訳ないが、祖廟すらまだ手にしていないからな。できることは自ずと限られてくる」

「正しき儀式なしに正しき即位は有り得ません。祖霊にも邪神にも申し訳が立ちますまい」

「今、魔界は乱れに乱れている。それを放置することこそが最大の不義であろう」

「……大魔王府としては、とても認められません」

ドラクウは、傍らにあつた杯の中身を干した。

喉が渴いたわけではない。緊張を隠すためだ。今からダーモルトに言わねばならないことは、それだけの意味がある。

言つてしまつたが最後、決して後戻りはできない。

「ダーモルト・デル・アーダよ」

「はい、ドラクウ殿」

「大魔王は、いつから大魔王府の承認がなければ即位できない存在になつたのだ？」

はつきりとダーモルトが息を呑むのが分かつた。

これは、ドラクウから大魔王府への決別宣言に他ならない。

「ドラクウ殿、それは……」

「大魔王府は、大魔王を輔弼するものだ。大魔王の即位に関する一切の権限は、大魔王ただ一人に帰属するはず。違うか」

五〇〇〇年も王統が続けば、大魔王家からも当然無能な者は出る。

その無能を補うためとはいえ、時代を追うごとに大魔王府の権限は拡大されていき、時には大魔王を上回ることもさえあるのは事実だ。それを、ドラクウは痛罵している。

「余の血は最も古く、しかして余の王権は最も新しい」

その言葉を合図に、脇に控えていたラ・バナナがダーモルトの前に進み出た。

手には一枚の洗皮紙を捧げ持っている。

「ダーモルト。これが余の宰相であるラ・バナナだ」

紹介され、ラ・バナンの深々と頭を下げてみせる。

宰相は、大魔王府で非常時に置かれる臨時最高職だ。ドラクウは、大魔王府に諮ることなくラ・バナンの新たな官職を授けると宣言したのである。

「ドラクウ殿、それは、つまり、大魔王府が魔界に二つ存在することになりますぞ」

「二つではないぞ、ダーモルト。正しい大魔王府」とは、大魔王を輔弼するものを指すのだ」

ダーモルトが、再度頭を下げた。

もはや、ドラクウとの間には一言の言葉もない。ラ・バナンの捧げ持つ絶縁状を受け取り、ダーモルトは踵を返した。

ドラクウを〈廃太子〉と貶めた大魔王府の中にあり、最大の親ドラクウ派であったダーモルトと袂を分かつことで、辺境の地アルナハの立場はより鮮明になった。

新大魔王、立つ。

魔界に、大きな嵐が訪れようとしていた。

ドラクウ 践祚の報は、瞬く間に魔界全土に轟き渡つた。

〈廃太子〉が大魔王位を継ぐ。そのことに対して批難の声はあまり聞こえなかった。血筋から言えば、ドラクウしかいない。誰もが知っていることだ。

大魔王家の血を引く男子で現在生存しているのは三人。

〈皇太子〉レニス、〈法皇〉リホルカン、そして〈廃太子〉ドラクウだ。

出家して神職となっているドラクウの叔父リホルカンも、女系でしか血を引いていないレニスも、本来なら大魔王位を継ぐことはできない。もし継ぐことができたとしても、継承順位はドラクウよりも下になる。

問題なのは、時期だ。

今のドラクウは魔界の南西部、〈シヨナンの赤い森〉に、城市を一つ所有しているに過ぎない。

新たな大魔王の拠つて立つ領土としては、いささか小さい。せめて南方の全てを併呑してから動きがあるだろうと考えていた物見高い魔王たちにとって、性急とも言えるドラクウの即位は驚きをもって迎えられた。

「その結果が、この有り様というわけだ」

アルナハ政庁の窓から外を見ながら、ドラクウは小さく溜息を漏らした。

眼下に広がる市街の、街路という街路を埋めるように、旅人の群れが歩き回っている。大魔王即位の式典に招いた者も中には交じっているが、それはごく少数に過ぎない。新大魔王を一目見ようとやって来た者や、そういった連中に物を売りつけようとする商人たちがほとんどだ。

拡張が進んでいるとはいえ、元がさほど大きくないアルナハ城市の容量を明らかに超す人数が、この街に滞在している。式典が行われる五日後までに、この数はさらに膨れ上がるはずだ。

既にリザードマンの文官であるシュリシアの計らいで、陶壁の外に大小の天幕が張られ、旅人たちの休養所として開放されている。長旅を経てここまでやって来た民をむざむざ夜露に濡らしたままにするなど、ドラクウの趣味ではない。

「既に、魔王やそれに準じる来賓の方々も、幾名か到着されております」

そう報告するのは、〈蛮王〉兼宰相に任じられたばかりのゴブリンシャーマン、ラ・バナンド。彼の差し出す洗皮紙に書き連ねられているのは、主にアルナハからそれほど遠くない場所に拠点を持つ魔王や豪族たちだった。

「樹精属に花妖属の魔王か。珍しいな」

「普段は外界のことに不干渉ですが、大魔王の即位式典には必ず出席しているそうです。後は、リザードマンの諸部族代表として家守族の魔王、ルーア殿がお見えです」

「リザードマンか。よく代表を出したな」

「代表とは言っていますが、おそらくはルーア殿の独断でしょう。家守族は、リザードマン五氏族の中で最も弱く、数の少ない氏族です。我々に庇護を求めてくるのかもしれないません」

「なるほどな。そういうことか」

アルナハの東、キリ・シュシュツの城市を中心とする広大な沼沢地に暮らすリザードマンたちは、氏族やもつと小さな単位に分かれて、互いに争いを続けている。時に多くの戦死者を出すこの内紛、とも言うべき小競り合いに、歴代の大魔王は心を痛め、幾度となく調停を申し入れた。

しかし、リザードマンたちは形の上では停戦命令の論旨を押しただきながら、すぐに再び戦いをはじめてしまうのだ。

「戦いこそがリザードマンの本性、と余に仕えたりザードマンの剣士が話していたな」

「彼らの宗教観は独特です。邪神に対する信仰を持たない」

「ああ、そうらしいな。輪廻を信じているのだったか」

死ねば、魂はまた別の者として生を享ける。

古い信仰の形だ。今ではもう、リザードマンにしか残っていない。魔界に暮らす多くの者にとつて、死とは完全なる終着点であり、そこより先には、無しかないと考えられている。

だが、リザードマンは違った。彼らリザードマンを構成する五つの氏族、つまり蜥蜴、蛇、鰐、亀、家守は、それぞれ関連しており、輪廻を繰り返しながら魂は五つの氏族を渡り歩いているのだという。

そして、五つの氏族全てで目覚ましい武勲を挙げた者の魂は竜に転生し、やがては天上の世界で永遠の安らぎを得るらしい。彼ら独特の、彼らにしか通用しない信仰の形だ。

「武勲を挙げるために必要とはいえ、飽きもせず戦い続ける強韌さには恐れ入ります」

「だが、意外に内政も上手い。シュリシアを見ただろう。あれで奴隷階級の出身だ」

シュリシアは、拾いものだった。

戦いで死ぬことを生きる目的とする戦士階級のリザードマンは、戦場以外で死ぬことを極端に恐れる。飢餓や疫病などもつての外だ。となれば、自然と内政にも力を入れざるを得なくなる。

だから奴隷階級に文字を教えて内政を任せ、自分たち戦士階級は何不自由なく戦争に明け暮れることができるようにしたのだ。

「そのリザードマンたちを、配下に加えたいと」

「ああ、あれだけの精強な兵力が、内にだけ向かっているのはどうにも惜しいのな」

「ごもつとも。文字の読める奴隷階級をこちらで登用すれば、文官不足にも歯止めがかかります」兵と文官の不足を一挙に補うことができるのは、とても魅力的な話だ。

今のアルナハでは人材不足が深刻だった。それが、これから新生大魔王としてドラクウが即位するにあたり、最大の不安要因になっている。この問題を解消することができれば、「北の霸王」と事を構える準備にも大いに弾みがつく。

大魔王位に就いたとしても、「北の霸王」からの圧力をはねかえせるだけの実力を手に入れない限り、それは絵に描いた宝玉に過ぎない。

「……それに、「蒼生した甲羅」キリックを放置しておくのは危険だ」

先の戦いで屠った、シェイプシフターの魔王「淫妖姫」パルミナは、ドラクウの暗殺を企てていた。

陰謀に長けた彼女は、ドラクウに美姫を送り込み、毒を盛ろうとしたのだ。その方法を調べる過程で、協力者としてリザードマン属の亀氏族を束ねるキリックの名が挙がっていた。

パルミナに利用されていただけなのか。それとも、主体的に策謀に加担したのか。それがはっきりとしない以上、リザードマンに何の対策もせず背中を見せることはできない。

「そのためにも、此度の即位式典は何としても成功させねばなりません」至尊の座に就いたドラクウの御稜威を魔界に遍く広める。

ドラクウが大魔王であるということを最大限に利用しなければならない。

「あと、五日か」

なんととはなしに、ドラクウは西の空を見つめる。

邪神が、もうすぐそこまで帰ってきている気がした。

「ところで、余は可能な限り儀式は簡素に執りおこなうように伝えただけだが」

洗皮紙の束を、ドラクウは執務机に投げ出した。

机の上には同じような書類が無造作に散らばっている。そのほとんどは請求書や見積書の類だ。

式典に際して、予想される支出の額はかなり大きい。叱責交じりの問いかけに、宰相ラ・バナンは何も答えず小さく頭を下げた。これからまだ増えるということだ。

衣装や食材にはじまり、政庁の修繕費に馬丁の賃金。果ては、旅で疲れた貴人の足を洗う木桶まで。細目は様々だが、全て大魔王即位式に必要なものばかりだ。

大魔王即位の式典は、単なる儀式としても外交的な示威としても、徒や疎かにはできなかった。今のドラクウには、領地も兵力も財力もない。あるのはただ、大魔王としての権威のみ。式典とは、魔界の民草と支配層にそのことを印象付ける大切な舞台なのだ。

それだけに、用意すべき物の質は自然と高くなり、購うために必要な金子の量は否が応でも増えざるを得なかった。

「これでは、アルナハの金穀蔵の床が見えてしまうな」

「資金不足はしばらく続くでしょう。ですが、主上が大魔王にお就きになれば、交易も捗るはずです」

本当にそうなるか、ドラクウは微かに疑問を抱いている。

宰相に任じたラ・バナンは、内政についての才を遺憾なく發揮しているが、どうしても理に偏るところがある。元は学者のようなことをしていた男だから、無理もない。癖のようなものだ。現実と、理論。

二つは重なり合っているようで、僅かにずれている。そのあるかなしかの差異に直面したとき、ラ・バナンは悩みながらも理の方を優先する。それは悪いことではない。文官の頂点に立つ者としては、その方がいいときさえ言えた。

侍女の淹れた湯冷ましの椀に口を付けながら、ドラクウは黙考する。

大魔王の座に就いただけで財政が劇的に改善されるということが、あるのだろうか。

もちろん、今までよりはよくなるだろう。地方に城市を一つ持つ魔王という立場と、魔界全土に号令を発する大魔王の地位とでは、意味合いが大きく異なってくる。

例えば、金山や銀山を領有すれば、貨幣を鑄造することもできた。

本来は、大魔王府と各四天王にのみ許された特権だが、ドラクウの配下には名目だけとはいえ、〈蛮王〉と〈竜王〉がいる。

ただ、まだ鉱山地帯の領地を有してはいない。

ドラクウには、大魔王となることで、そのような状況がすぐに改善するとは思えないのだ。

先程ラ・バナンに手渡された来賓の一覧には、魔王の名が少ない。魔界に一〇八いるとされる魔王の中で、純粹に大魔王としてのドラクウに恭順の意を示す者は、まだほとんどいないというところだ。

それは仕方がない。

魔都はまだ〈北の霸王〉に押さえられたままで、大魔王府とも袂を分かった。今のドラクウには本当に名目しかないのだ。ここから雄飛するには、権力や領土、そして何よりも兵力といった「実」が必要だった。

この式典を成功させ、内外に力を示す。

そこで得られた声望を元に、一気に実力を伸ばさなければならなかった。

「そのためにも、まずは金か」

誰にともなくドラクウが呟く。

アルナハは決して貧しい城市ではない。

以前にここを治めていたゴプリンシャーマンの魔王の時代と比べると、状況は格段によくになっている。

簡素で分かりやすい税制。適切に行われる裁判と周知された法律。市場や街道の整備にもドラクウは心を砕いていた。

人が集まりやすくなれば、そこに商いが生まれる。僅かな期間で、アルナハは辺境でも有数の商業都市に生まれ変わりつつあった。

城市一つとしては十分に潤っているのだ。しかし、そこから大魔王としてのドラクウを支えるだけの収益までは、確保できていない。そんなことは魔都でさえ不可能だ。

繁栄した一城市程度の富の集積では支えきれないほどの金穀が、大魔王には必要となる。大魔王

府とはそもそも、大魔王家の保有する莫大な資産と、巨額の支出を管理する家産管財人だったという話さえある。

今のドラクウは、必要な経費の多くを富裕な商人からの借款で賄っている。純粋な好意と、将来に向けた投資のつもりだろう。利子がそれほど高くはないのは、大魔王への顔つなぎのつもりなのかもしれない。

重税をかける気はなかった。民に平穏をもたらすために踐祚するのだ。その民から血の一滴まで搾り取るような政などをしていては、折角ドラクウに集まった期待も容易に怨嗟へと置き換わってしまう。

民を虐げずに、金を得る方法が必要だ。

ただの貴金属の塊に、どこまで縛られなければならないのか。

先代大魔王である祖父も、その父も、財政には苦勞をしていた。魔界を統べる絶対者であるはずの大魔王が、金貨銀貨の多寡ごときに一喜一憂せねばならないのはどうにもおかしかった。

そんなことを考えていると、不意に目の前の虚空が揺らいた。

「資金の心配なら、何とかしてやれると思う」

懐かしい声だ。

ドラクウの目の前に、邪神ヒラノが立っていた。

顔付きが少し精悍になった。

久しぶりに会った邪神は以前より神々しさが増したように、ドラクウには見える。

「ドラクウ、待たせたな」

待っていないかったと言えば嘘になる。

辺境に流れてきたときに出会ったこの風変わりな邪神を、ドラクウはいつの間にか密かな心の拠り所にしていたらしい。一時とはいえ離れていたことでよく分かった。

「お待ちしておりました」

自然と口から出るのは、敬語だ。

魔界で無謬の絶対者の座にこれから就こうというドラクウだったが、この少しも厳めしいところのない邪神ヒラノに対してだけは、敬して振る舞うことができる。

自分だけが信じる、自分だけの邪神。そう願って出会った邪神だった。

「大魔王に就くそうだな」

「はい、五日後に」

時期尚早だと叱責を受けるだろうか。今はまだ一城市の主に過ぎないドラクウが、大魔王になるうとしていることを、この邪神はどう見るだろう。

だが、予想に反して邪神は口元に柔らかに笑みを浮かべた。

「おめでとう、ドラクウ。心から祝福しよう」

「……お叱りにはならないのですか。邪神にも諮らず、このような大事を」

「最初から邪神に伺いを立てるような大魔王が、天下を治めることなどできまい」
なるほど。それもその通りだ。

そもそも歴代の大魔王に、邪神など見えなかった。それを、自分だけが邪神に頼るようでは先行きもおぼつかない。そのことを戒めてくれているのだろうと、ドラクウは感じた。

「ところでドラクウ、先程、金の心配をしていたようだな」

「はい。邪神であるヒラノ様にこのような醜態、お恥ずかしい限りですが。何か、妙案がおありですか」

「いや、案ではない。もう、すぐそこまで来ているはずだ」

そう言って邪神が窓の外を指差す。相変わらずの賑わいだが、何やら騒がしい。

歓声の源は、どうやら西に開いた門の辺りのようだ。

「何か、見えます。白い……柱のような……」

「あれは、塩だ」

六頭立ての駿馬に牽かれた馬車が、巨大な塩の柱を運んでいる。高さは、ドラクウの倍ほどはあるだろう。魔界には塩を産する土地が少ない。海水を煮詰めて作る産物が内海沿岸に点在しているが、塩はいつでも不足気味だ。あれだけの大きさの「塩」、市場に流せばどれほどの値が付くか分からない。

「塩、ですか。あの柱全てが」

「柱に見えるがな、実際は煉瓦の形に掘り出した塩を、円柱状に積み上げてあるだけだ。式典に集まった他の魔王に見栄えがするだろう?」

「それはもちろん」



「あれと同じものを、一〇本。馬車ごと用意してある。今回の遠征の戦利品だ」

「一〇本……あれと同じものが、ですか」

見れば、街路では既に利に聡い商人たちが人を走らせている様子が見える。

これでアルナハの、いや魔界南方の塩の値は一時的に暴落するだろう。だが――

「人界に、ルクシユナを駐在させてきた。連絡役には、クオン。塩と馬を継続的に輸入する手筈は、タイバンカが整えた」

「それでは、これだけの塩が継続的にアルナハに？」

「ああ、対価は米だ。他の食料でもいい。人界からこちらへは馬で運び、帰りは河まで人手で運ぶ。そこで荷渡しをすれば完了だ」

見事な手筈だった。

人界への侵攻は、繰り返し行われる掠奪のようなものになると考えていたドラクウの予想を大きく上回っている。これではまるで、交易だ。

「渡河者のやることを大規模にしただけだ」

「そうは仰いますが、これだけのことをよくも」

「魔界の隅と人界の隅、ともに端に暮らす者同士だ。助け合っても罰は当たるまい」

その罰を当てるはずの邪神がそうやって笑っているのだから、問題はないのだろう。こういう発想は、魔界にはないものだ。邪神の助力なしでは、おそらくこんな結果にはならなかった。

「ドラクウ、アルナハに流通する塩にかかる税を下げられるか」

「ラ・バナン、どうだ？」

邪神が顕現してから隅に控えていたラ・バナンが即座に頷く。

「これだけの塩が定期的に入るとなれば、塩税は大いに下げることが可能でしょう。今までの半分以下に下げても、補えます。他の塩の産地よりも、安くすることができると思われます」

商取引にかかる税の中でも、塩の税は特別だ。生きとし生けるものの生き死にに、塩は関わる。

それだけに大切に、儲けも大きい商品だ。その出入りに応じて管理すべきことは多く、税を下げるのは難しかった。

だが、塩を人界から輸入できるようになれば、話は変わる。もちろん、商人の動きも。

塩を商う商人は、何処の城市でも一廉の規模を持っている。それらの商人が率いる商会は、これからこぞつてこのアルナハに商館を構えるだろう。

そのときに戦わなければならないのは、沿海の塩産地だ。それらの産地に比べて、そもその塩の値と塩税を足した額が安くなれば、アルナハは一気に塩流通の交易中心地へと発展する。

「ドラクウ様。最初は流通量を絞り、商会の出口を見せるべきでしょうな」

「ああ、ある程度の備蓄も用意しておこう。値崩れや暴騰を防ぐためにも必要だろう」

これは、大魔王即位への最大級の土産だった。

塩があれば、塩から上がる利以上のものが、アルナハにもたらされる。

大魔王の在所としての「権威」の中心と、塩交易の中心。二つが合わさると、それは一つ一つよりも大きな意味を帯びてくるはずだった。

話の続きは、食事をしながらということになった。

邪神官長であるエリイナと、新たに「童王」に任じることになっているラーナも招いての、内輪だけの小規模な宴席だ。邪神を労い、大魔王即位を祝う。そういう、小さな宴だ。政庁の中に幾つかある客間の一つに入りきる程度の人数でしかない。

侍女が水晶碗に食前酒を注いで回る。

地元の豪族から献上された澄み酒だ。濁酒と違い、こちらは醸造した上澄みをこしてある。水がいいのか、微かに薫る果実のような芳香が芳しい。口当たりはいいが酒精は強いので、度を過ぎさないようにと、水晶碗は小さなものを用意させていた。

いずれはこういうものも、南方の産品として魔界に流通させたい。平和であれば、いいものは北でも南でも共有できるのだ。

「ヒラノ様と主上に」

ラ・バナナが簡潔に乾杯の音頭を取り、ささやかな宴がはじまった。

塩によって資金に目途が立ったとはいえ、華美に過ぎない慎ましやかなものだ。

振る舞われる料理には、アルナハで新たに生育を奨励しはじめた豚の肉も、ふんだんに使われている。卓の中で一番大ぶりの皿には、肉の柔らかい仔豚を丸焼きにしたものが載ることになった。だが、まだ焼き上がっていないようだった。

「ドラクウ、パルミナの治めていた城市の接収は？」

蒸した野菜を口に運びながら、邪神が尋ねる。ドラクウは料理を口に運ぶのを一旦止め、小さく

頷いた。

「大魔王として即位したあとに、その名において帰参を命じる予定です。既にダッダを送り込んでおります。今は荒れているようですが、必ず」

「淫妖姫」パルミナが死んだからといって、その治めていた城市が空き城になるわけではない。そこには日々の暮らしを営む民がいて、それぞれに色々な思いを抱えている。

パザンという城市は、元々シェイプシフターの故地ではない。長くダッダたち人熊が住んでいたところに、政治の事情であとからパルミナたちがやって来た。多くの人熊は、「シヨナの赤い森」に追われて、狩人のような生業で糊口を凌いでいたが、いつか街に帰りたいと考えている者がほとんどだという。

対して、今そこにいる民のことも考えねばならない。

シェイプシフターは、他の種族に変幻する。その変幻の見本となるように、自分たちの城市には多くの種族を住まわせていた。彼らの中には、本来の氏族の中で虐げられた者や、罪科を負って生来の土地に帰れない者も少なくはない。

対外的には謀略を張り巡らせる姦婦として名を轟かせた「淫妖姫」だが、内治については他の魔王と比べても穏当な部類に入る。拾われた恩義を感じている住民の中には、パルミナへの報恩の意識から、ドラクウ憎しと暴動を企て、実際に破壊活動に及んでいる者すらいる始末だ。

これまでのドラクウ軍に、これを抑える余力はなかった。

治安の維持には人が要る。それが元々敵地であれば尚更のことだ。大義名分なき進駐は、住民と

の軋轢を生み、その後の統治に深刻な支障を来す。避けられる面倒は、避けるべきだった。だが、ドラクウが大魔王となれば、話は全く異なったものとなる。

魔王不在の城市を大魔王が自ら接収することに、異議を唱える者は法的には存在しない。

「それよりも、カタニアです」

ラ・バナナが、溜息交じりに城市の名を出した。

彼にとっては従兄弟にあたるリ・グダンの拠っていた城市だ。賊に墮ちた者を多く従えていたので、そこはいつの間にか「賊都」などという通り名で呼ばれている。

「破却するしかない、思う」

絞り出すようにドラクウが呟く。

「未だに、一〇〇〇をくだらぬ賊徒があつたので、離散集合を繰り返しているようです」

ラ・バナナも苦々しげに応じた。

賊徒の跳梁は、まだ続いている。

一度集まりはじめると、辺りに物がなくなるまで暴れまわるのだ。外からの力がなければ、自然に解体することはない。賊徒に襲われた村々は生活の拠り所を失い、その男たちもまた、賊徒になつてしまう。そういうよくない巡りの中心に、カタニアという城市がある。

ほとんど廢墟のようになっていたとはいえ、新たに得られるかもしれない城市を破棄しなければならぬのは辛いことだ。しかし、賊徒の核としてのカタニアをいつまでも放置しておく、賊徒の跋扈を放置することになる。今は先日の敗戦を受けてカタニア周辺に留まっているが、賊徒など

蝗のようなもので、食い尽くすだけ食い尽くせば、他の地域に襲いかかってくる。それが、アルナハやその周辺の村々ではないと言いきれる保証は、どこにもなかった。

あの難治の地を任せられるような魔王でもいたら、話は違ってくる。だが、ドラクウにその者の顔はまだ見えなかった。

「大魔王が即位して、よくなったと皆が感じねばならない。そのためには、目に見える変化が必要だ。例えば、賊徒の害が減るといふような」

「主上の仰る通りです。善政を敷いていることが、目に見える形で伝わる工夫が必要でしょう」

ドラクウとラ・バナナのやりとりに、邪神は黙して語らない。ただ静かに水晶碗を干している。方針に指図をするつもりはないのだろう。ただ、見守っている。そんな雰囲気だ。

そうこうしているうちに、仔豚の皿が運ばれてきた。

肉の焼ける旨そうな匂いが客間に広まる。切り分けるためにドラクウが小刀を肉に突き入れると、そこからじわりと肉汁が溢れ出した。焼き方がいいのだろう。中まで均等に火が通っている。

これに、邪神が人界から持ち帰った塩をたっふりと付けて食べるのだ。今までのアルナハでは、贅沢でできなかった食べ方だった。

「……これは」

一口食べたラーナが、感嘆の吐息を零した。

ドラクウもそれに倣う。旨い。口の中に広がる肉汁は羊のような臭みがなく、食べやすい。それでいてしっかりと力強い味わいだ。素材の旨味を、塩がしっかりと引き立ててくれている。

「予想以上に旨いな」

「はい、主上。式典の宴でも、これと同じものを出します」

ラ・バナンの目論見はすぐに分かった。塩だ。

人界からもたらされたこの塩は、魔界の藻塩焼きで作られる塩と違い、微かに甘い。この塩を賓客に売り込むことで、得意客にしてしまう腹積もりなのだろう。

「如何ですか、ヒラノ様」

「ああ、旨いな。だが、もう一味……胡椒があればな」

「……胡椒、ですか？」

「聞いたことがあります」

おずおずと手を挙げたのは、ラーナだった。

リザードマンの領地の奥、沼地の絶えるところに、胡椒と呼ばれるものが繁茂しているらしい。

「しかし、リザードマンたちはそのことを、目潰し弾に加える薬か何かのように言っておりましてが」

「リザードマンは味に頓着しない、と言われておりますから」

ラ・バナンの言うように、リザードマンは味にさほど煩くない。傷んで腐りかけた肉でも平気で食べるので、むしろ悪食であると認識されていた。

味覚だけではない。来世で竜に輪廻することのみを願いとしているリザードマンにとって、現世での快樂など全ては幻のようなものに過ぎないのだという。

「ヒラノ様。その胡椒があれば、この肉がもつと旨くなると、そういうことでしょうか」

「ああ、ドラクウ。胡椒も含めた香辛料があれば、料理の幅はもつと広がるだろう」

少し酔ったのか、邪神の顔がほんのりと赤い。

邪神でも、酒に酔う。そのことがドラクウには妙におかしく感じられた。

それにしても、胡椒だ。

リザードマンと事を構えず、後顧の憂いを断つただけに使者を送ろうと考えていたが、そういう産品があるのなら、交易の流れに組み込むことができるのではないだろうか。

対価には、塩を渡す。

リザードマンといえども、生きるために塩は必要だ。今はリザードマンの沼地を挟んでアルナハと反対、〈東の冥王〉の領地から高値で塩を買っていると、シュノンからの報告書には書かれていた。

「それは、よいことを伺いました」

感心しながらドラクウは杯に口を付ける。魔界は広く、ドラクウの知らぬこともまだまだ多い。

「胡椒は肉に合う。人界でも、肉を食う者は多いはずだ。あちらにもいずれば輸出できるかもしれない」

澄み酒が余程口に合ったのだろう。酔眼の邪神は、ほとんど卓に突っ伏すようにしてそう言った。人界との商いを、太くする。それは悪い考えではなかった。

魔界の南方を束ね、〈北の霸王〉と対峙するのに、金がいくらあっても足りない。兵を養うにも、

戦うための糧食にも、そして武器にも、金がありすぎて困ることはないはずだ。

金のために金を得るのではなく、目的のために使う金を稼ぐ。

〈廢太子〉ドラクウは戦巧者だというのは、誰からともなく言われてそうあろうとした結果だったが、本当はこちらの方が向いているのかもしれない。

そう思いつつ、水晶碗の中身を呷る。

そのとき、ドラクウの目の前の虚空が、揺らいだ。

▼▼▼【邪神】

「ヒラボン、起きて！」

気持ちよく酔っ払っているところを揺り起こされた。

目の前に立っているのは慶永さんだ。してみるとここは囲碁将棋部の部室か。道理で居心地がよいはずだ。顧問が隠していた一升瓶を拝借して飲んでいるうちに、うたた寝してしまったのだろう。

「……慶永さんも、一杯引つかけますか？」

手にした碗を軽く持ち上げて誘ってみる。

威勢のいい返事がくると思ったのだが、意外にも先輩は突っ伏す俺にぐっと顔を近づけてきた。良い匂いが鼻をくすぐる。耳元で囁くような先輩の声が聞こえた。

「ああもう、酔っ払っちゃって。みつともないな、皆が見てる」

皆？ 皆って、誰だ？

そう思つて顔を上げると、ドラクウやエリイナが心配そうにこちらを覗き込んでいる。

そこでまどろみから醒めた。嫌な汗が背中を伝う。何が部室だ。ここはアルナハの政庁じゃないか。

今は宴席の最中で、大魔王即位を祝っていたんだ。豚の丸焼きが出てきて、胡椒がどうこうという話をしたところまでは覚えてる。

エリイナが差し出す水を受け取りながら、頭を振つてシャッキリさせようとした。

だが、まだ酔いが残っているのか、頭がガンガンする。

「ちよつとマスター、大丈夫？」

こんなに酔つたのは、邪神になつてはじめてのことだ。

牡蠣にあたるなんていう間拔けな死に方をしたけれど、転生してみると、暑さや寒さ、食欲や睡眠欲からは完全に解放された。それなのに、酔いはそのままなのか。それともただ単に、疲れが溜まっただけなんだろうか。

視線を巡らせると、慶永さんが俺の顔をじっと覗き込んでいる。

腕を組んで頬に人差し指を当てるのは、彼女が考え込むときのいつもの癖だ。

「……マスター、大事な話がある。ちよつと神界に行こう」

「あ、ああ」

喋るのも億劫で、それしか言葉が出ない。身体から徳がするりと抜けおちているような、そんな心許なさを感じる。

慶永さんの支えを借りながら、ゆっくり身体を起こした。助けに入ろうとするドラクウを、そつと手で制する。

「心配するな、ドラクウ」

「しかし……お加減が」

「我は少し、養生する。姿を見せなくとも心配はするな」

「はい、それでは……」

ドラクウが、言いくそうに言葉を濁す。

回らない頭で考えて、何を言いたいのか思いあたった。

「即位式には、出られないかもしれない。だが、気にする必要はない」

「……そうですか。ヒラノ様には、是非ご来臨いただきたかったです。無論、顕現なさらずとも、です」

邪神の政治利用抜きに、単純に晴れの姿を見て欲しいということだろう。そもそも、たった一人の信者と邪神としてはじまった間柄だ。少し歪な二人三脚でここまで来たのだから、俺だって見てやりたい。

とはいえ、確約はできなかった。

慶永さんの表情から察するに、これは単なる体調不良でもないのだろう。それ以前に、邪神にも

体調不良があるのかどうかすら、俺は知らない。

今まで意識的に避けてきたが、邪神という存在である自分と、そろそろ本気で向き合わなければならぬ。ならない。そのためには、神界にしばらく籠らなければならぬかもしれない。

「ドラクウ、そうやって誘ってくれるのは我としても嬉しい」

「はい、では……」

「だが、考えてもみよ。大魔王に即位することの意味を」

「……意味、でございますか」

声音に力を籠める。それほど威厳のある見てくれではないが、これから話すことは俺の本心だ。

「大魔王に就くことは、ドラクウ、お主にとってまだ出発点に過ぎぬ」

その言葉を聞いて、ドラクウが俯いた。表情は見えない。

〈魔太子〉なんて酷い二つ名で呼ばれていたドラクウだ。多分、即位には思い入れがあるだろう。

でも、それだけでは駄目だ。

俺よりもよっぽど立派で、よっぽど苦労しているドラクウだからこそ、しっかりと分かって欲しい。

「大魔王に成ることが大切なのではなく、大魔王として何を為すかが重要なのだ」

目標が大きければ大きいほど、達成した瞬間に燃え尽きてしまう人がある。もしドラクウにとつて、大魔王の位というのがそれだけ大きなものだったとすれば、彼にはそれを乗り越えてもらわなければならぬ。

「本当に為すべきことを見失うな、ドラクウよ」

言い終わったところで、顕現を解く。ドラクウたちからは、俺の姿が空気に掻き消えたように見えたはずだ。これでいい。本当は式典を見たかったが、ドラクウにはドラクウの、俺には俺のやることがある。

慶永さんが、妙なものでも見るような顔つきでこちらを見ている。

「マスター、何か悪いもんでも食べたかい？」

「いや、死んだのは牡蠣にあたったせいですけど、今回は特に」

「いやに真面目な演説をはじめちゃうし……ともかく、体調はよくなさそうだからね。一度神界に顔を出してみよう」

そこで俺は、妙なことに気が付いた。普段は顕現を嫌う慶永さんが、わざわざドラクウの前でその姿を現していたのだ。

「そういえば慶永さん、何で今日は顕現してたんですか？」

「ああ、もう一つ大事な用があったからさ。見えないままでマスターだけ連れていくのも気が引けたんでね」

「……大事な用？」

何だか嫌な予感がする。

そして、高校時代からこういう予感は外したことがないのだ。

「オイレンシュビーゲルが、唯一神側に寝返った。多分、マスターも事情聴取か査問会議、ひよつとしたら証人喚問にかけられるかもしれない」

神界の門を潜ると、大通りがまっすぐに続いている。

その両脇には古今東西、地球上に存在したありとあらゆる宗教建築物を模した建物が軒を連ね、その周囲を美しい緑が取り囲む。神々が行き交う雑踏には潤いと涼しさを与える小川がせせらぎ、憩いのための小庭園や東屋が随所に配されていた。

その印象は、生前に漠然と思いついていた天上の世界よりは、少し騒々しいかもしれない。賑やかで、活気に溢れていると言った方が良さだろう。そこに住んでいるのは、紛れもなくこの世界の神々や邪神なのだが、ともすると新宿や渋谷、池袋の雑踏を歩いているような錯覚に見舞われる。みんな、人間臭いのだ。すれ違うときのちよつとした仕草の一つをとつても、神々しさとは無縁の、生の人間味がそのまま残っている神が多いような気がする。

前回来たときは転生したばかりで、それが当たり前のように感じた。だが、地上でドラクウやル口たちに一柱の神として接する中で、なんだか妙な違和感を覚えるようになってきている。

「マスター、もうちよつとだから辛抱してね」
情けない話で、体調はまだ戻らない。

慶永さんに肩を貸してもらうほどではないが、ここまで飛んでくるのでやっとだった。何が原因かは分からないが、今すぐにでも横になりたいくらいに倦怠感が全身を蝕んでいる。

露店で売られている何かの揚げ物が匂いを漂わせているが、今の俺には気持ちが悪いだだけだ。周りの神さまたちは物珍しそうにこつちを見て、少し侮蔑したような笑みを浮かべながら、道を

開けてくれる。苦しみから解放されたはずの神の身体でこんなことになるなんて、神格が低いと嗤わらわれているのだろうか。

「さ、マスター。歩かせてごめんね。やっと着いたよ」

慶永さんに連れてこられたのは、通りから少し入ったところにある一軒の小さな薄汚れた建物だった。周囲には二階建てや三階建ての建物が多いのに、ここだけ平屋なので、昼間だというのに薄暗い。

扉の横には小さな看板で「藪やぶ医院」と掲げられていた。

「ヤブ先生、いるかい？」

建物の扉を開けると、病院特有の薬臭い空気が漂ってくる。

返事はなかったが、慶永さんは気にせず待合室のソファに俺を座らせた。

「慶永さん、神さまにもお医者っているんですね」

「まあね。人間や魔族に崇あがめられる、医療の神さま、じゃなくて、神さまを診みる医者つてのはそれほど多くないんだけどね。腕のいいのとなると、なお少ないよ」

「……この先生、腕はいいんですか？」

俺の問いかけに、慶永さんはそつと顔を背ける。

「……入り口に藪医院つてありましたけど、まさか」

「……マスター、よく考えて。今、マスターと私は、査問やら証人喚問にかけられるかもしれないお尋ね者同然の身の上なんだよ。そんな奴が、大手で腕がよくて客もいっぱいいる医者にかかっ

たらどうなる？ 一発で居場所が割れて、すぐに見つかっちゃうじゃない」

「俺たちつて今、そこまで大変な状態だったんですか……？」

「物の喩たとえだよ。物の喩たとえ。用心するに越したことはないって話。呼び出されるにしても、相手の出方を見極めてからの方が有利だからね。だからこそ、私は気を使つてこういう人気のない藪医者をね」

「だあれが藪医者だつてえ？」

「うおあ!？」

部屋の陰からのつそりと現れた老人に、俺と慶永さんは飛び上がって驚いた。

ぼつさばさの白髪に顔の下半分を覆い隠すひげ。そんな面相なのに、はつきりと分かるほど酔っ払い、息は酒臭い。白衣と聴診器を身に付けていなければ、どこかの路上生活者にしか見えない。

「藪先生、いるならいるで返事してくれる？ 心臓が悪いじゃないか」

「いや、すまんすまん。最近ずつと酔っぱらってるから、お前さんたちが本当の患者か、ただの幻覚なんか区別が付きかねてな」

とんでもない医者もいたものである。

そうは言っても、何もなければ病気も怪我けがもしなさそうな神さまたちの医者だ。普段は無聊ぶつろうをかこつのも無理はないことなだろう。

「幻覚は儂わしのことを藪医者だなんて貶けなしたりはせんから、ああ本物じゃ、と」

「先生、そういう与太話よたばなはいいんだよ。それより、この邪神を診みて欲しいんだけど」

「ん。聞いておるよ、お嬢。お嬢の主神マスケなんじゃろう」

「……よろしくお願ねがいします」

藪先生の診察は、俺に舌を出させたり目の下を診みたり聴診器を胸に当てたりと、人間のときに受けていた診察と何ら変わり映えのしないものだった。

水晶玉で診みて悪いところが分かったりするのかと、少し期待していただけに残念だ。

「ふん、なるほどな」

カルテにドイツ語らしきものを書き込みながら、先生が頷うなずく。

「お前さんの症状について、心当たりはある。が、今すぐにどうこう言うことはできん。こつちもいくらか調べものをせにゃならん。不確実なことを言うのは医道に反するからな」

「それじゃ」

「今日のところは、ヨシナガ嬢ちゃんの膝枕ひざまくらで休んでおけ」

「なっ？」

赤くなったのは俺だけで、慶永さんは泰然たいぜんとしたままだ。

「ともかくも、今言えることは何もない。よつて対策も今できることはない。しつかり休むことだ」

「……そうですか」

確かに、酔いはじめに比べれば体調は少しマシになったような気もする。

だが、何も手が打てないというのはどうにも歯がゆい。

「まあ、どこかに隠れてゆつくりと休んだらいいじゃろう」

「……隠れる？」

「ああ。嬢ちゃんたちは、ちょうどいいタイミングじゃった。ほんの少し早かったら、ガーフィンケル派の奴らはぢらと鉢合はちあわせするとこじやつた」

ガーフィンケル？

聞いたことのない名前だ。慶永さんの方に視線を投げると、小さく首を竦すくめ、続けた。

「ガーフィンケル。神界会議最大派閥はぼうである融和調整派の領袖ボスで、通称「知患者の神」ガーフィンケル。この世界を創った神々の、最後の生き残りよ」

「その神さまって、有名神ゆうめいじんなんですか？」

藪医院の給湯室を勝手に借りて、慶永さんが茶を淹いれてくれた。

料理や菓子作りが壊滅的に苦手な彼女も、一応それくらいのことではできる。待合室に柔やわらかい緑茶の香りが漂うと、少し気分が楽になったような気がした。倦怠感けんたいかんは相変わらずだが、悪心おしんは少し軽くなったようだ。

「まあ、そりゃ当時は小物だったとはいえ、世界を創った神さまの一人だから。知らなけりゃモグリだね」と慶永さんが笑う。

そんな神さまの仲間が探しに来るっていうことは、ひよつとしてとんでもない大事おおじになっているんではなからうか。まるで指名手配でもされている気分だ。

俺たちが追われる理由は、オイレンシュピールゲルにある。

ティル・オイレンシュピーゲル。ドラクウの治めるアルナハと、大河を挟んで対岸に位置する人
族の領域、ワーボルト地方で信仰されていた神々の一柱だ。確か、担当していたのは〈悪戯〉。

そのオイレンシュピーゲルの頼みで、俺とドラクウが人界への侵略をすることになったのは、つ
い先日のことだ。唯一神を信仰する「聖堂」の信者をそれ以上増やさず、古い神々への信仰を取り
戻すためというのが、本来の目的だった。

結果として人界への侵攻は、ドラクウの軍と戦士の一族との連帯を築き、新たな交易路の開拓と
いう副産物を生んだのだが、これはほとんど怪我が功名と言っている。時期が悪ければ、双方が対
立して刃を交えることになっていてもおかしくはなかったのだ。

オイレンシュピーゲルが、唯一神に寝返った。そのこと自体にはあまり驚きを感じない。

自分たちから離れていった人々の信仰を取り戻すために、飢饉や災害、疫病を起すというあい
つのやり口は、正直言って気に食わなかった。

そんなやり方は神として相応しくないと、直接怒鳴りつけてやりたかったくらいだ。

そのオイレンシュピーゲルが寝返ったことで、こっちにまで火の粉が降りかかってきたのは腹が
立つ。こちらにやましいことは何一つないのだから、さっさと釈明して終わりにしたい。

ただ、そう簡単に行かないのも理解している。

どのくらいの割合で寝返る神さまがいるのかは分からないが、他の神々を天使として使役する唯
一神に寝返ることは重罪のはずだ。

そうなれば、その場に居合わせたことになる俺たちにも、相応の嫌疑がかけられるだろう。下手

をすれば、オイレンシュピーゲルが残した残置工作員と見做される危険すらある。

もちろん、そんなことは杞憂で、ちよつとした質問事項に答えることで解放される可能性もある
だろう。しかし、必ずしもそうと言いつけない以上、慶永さんの言うように、事前の情報収集をし
ておくべきだ。相手の狙いが分からないうちに出頭して、変な言いがかりを付けられるのだけは、
まっぴらごめんだった。

「そのガーフィンケルって神さまは、俺たちを見つけてどうしようって言うんでしょう？」

「さあねえ。そればかりは本神に聞いてみないと分かんないなあ。譴責か訓告か。ひよつとする
と江戸所払いに遠国島流し、みたいなことになっちゃうかも。でもちよつど時期が重なっただけで、
別件ってこともあるかもしれないし」

緑茶を啜りながら、慶永さんは饅頭に手を伸ばす。今のところあまり心配していないのだろうか。
「しばらくは潜伏しつつ様子を窺うことになるかなあ。私自身が動くわけにもいかないし、伝手を
辿って情報を集めながらさ」

「伝手なんてあるんですか？」

「私を誰だと思ってるの。餅は餅屋ってね。相手に勘付かれないように上手く情報が集められると
思うよ。だからマスターは、大船に乗ったつもりでどんと構えていてくれればいい」

慶永さんもこう言ってくれていることだし、本調子じゃない身体を治すためにも、しばらくゆっ
くり静養させてもらおう。だが、折角の時間をただ無為に過ごすわけにはいかない。

この貴重な時間を使って、やるべきことが今の俺にはある。

「ところで慶永さん、調達して欲しいものがあるんですが」

「なにさ、マスターがおねだりなんて珍しい」

俺はそこで一呼吸置いた。これを言ってしまうえば、後戻りはできなくなる。そんな気がしたのだ。「会議のルール」と、神界が会議によって開催を禁止している文化や技術の一覧”ってのを、それぞれまとめて見るのできる資料はありますか？」

「……もちろん、手に入る。で、それを使ってマスターは何をしかそうって言うんだい？」

「俺の神階は低い。少初位上では、会議に出ることはできない。そうですか？」

「ああ、会議への正式な参加資格があるのは、五位以上の神か邪神に限られる」

「なら、好都合じゃないですか」

自分でも分かるほどに、酷薄な笑みを口元に張り付ける。

「慶永さん、相手がわざわざ呼んでくれるというのです。ならばその場でこちらの好きにやらせてもらいましょうよ」

ピンチは、チャンスだ。向こうの意図を逆に利用してやる。兵は詭道なり、と孫子も言っている。本来ならまだ参加することさえできない会議に、向こうから招待してくれるというのだから、これを使わない手はない。

「マスターは、会議をめっちゃくちゃに引つ掻き回すつもりなんだね？」

「はい。それはもう、めっちゃくちゃに」

慶永さんが嬉しそうに微笑み、鼻をふふんと鳴らす。

「いいだろう、マスター。私に考えがある。細工は任せてもらおう」

▽▽▽【魔王】

即位式の饗応としては、奇妙な趣向だった。

政庁の中に設えられていたのは、大きな長机とそれを囲むように配された床几だ。

これではまるで軍議だと、列席者の一人が囁く。

集まった魔王や有力者の全てが、大魔王ドラクウに恭順を示すつもりであったわけではない。大魔王の即位式に馳せ参じることの重要性と、(北の霸王)ザーディシユの威圧を両天秤にかけての行動だ。

ほとんどの者は、ドラクウが勝つことを信じていない。それが証拠に、自分自身は列席せずに、臣下の中から主だった者を派遣するに止めている魔王のなんと多いことか。

ドラクウの総動員兵力は、おおよそ一万と見られている。

一城市を抱える魔王としては確かに多いが、二十四万とも言われる私兵を擁するザーディシユとは比較するのも莫迦莫迦しい。そのことは、この場に集まった魔王や代理の者の全てが把握している。

この式典はあくまでも儀礼的なものであり、同時に普段は顔を合わせない者たちの様子を探る諜

報戦の舞台として皆に捉えられていた。

「静粛に」

さざめく城内に、宰相ラ・バナンの朗とした声が響く。

しかし、待ちわびた料理の代わりに長机を彩ったのは、精緻に描かれた魔界南方の絵地図であった。大魔王ドラクウの本拠と定められているここアルナハを中心に、四方に走る街道が細いものも含めて全て描き出された値打ちものだ。

「これから、主上より全体戦略に関する方針の発表が下される」

ラ・バナンの言葉に、列席者の一部から呻き声上がる。

完全に嵌められた。これは「まるで軍議のような」祝宴ではなく、軍議そのものなのだ。

軍議とはすなわち意思統一の場と言える。一度参加してしまった以上、これではドラクウの勢力に加担すると見られても言い逃れはしにくい。

日和見主義者の集まるこの宴会に、ドラクウは最初から畏を仕掛けていたということだった。

「皆の者、領地運営が多忙の中、此度はよく集まってくれた。これより余は全体戦略の方針を宣する」

続いて入ってきたドラクウも、堅苦しい挨拶は一切しない。

それどころか、儀礼用とはいえ鎧に身を包み、剣すら佩いてみせている。常在戦場の誓いを立てているわけではない。この場が式典ではなく軍議であることを一目で示すための演出だった。

「そうは言っても、この場には軍議に参加したくないと考える者もいるかもしれない。余は悪魔で

はないから、そういう者たちについてはこの場からの退出の自由を与えよう」

それを聞いて安堵の吐息を漏らしたのは、主人の代理としてこの場に送り込まれた者たちだった。この場でドラクウ派であると旗幟を鮮明にしようのは、あまりにも危険が大き過ぎる。主人が〈北の霸王〉の側に付いた場合、自分だけが叛逆の汚名を着せられて処断されてしまう可能性さえあるからだ。

当然のことだが、動揺しない者もいる。

大魔王家への忠義に溢れる者もそうだが、それはあくまでも少数派だ。大半は、現在のザーディシュのやり方ではこれ以上の勢力拡大が望めない者たちだった。ドラクウに恩を売ること、将来の魔界において有力者の地位を得ようとする彼らにとって、この場はまさに自身を売り込む格好の機会だ。

人目を忍ぶように広間から退出していく者がいる一方で、自分の売り込みに熱心な者は少しでもドラクウに近い席に座を占めようとする。

ゴブリンジェネラルのロ・ドウルガンは、ゴブリン属としては異常なまでに大きなその身体を大儀そうに床几に沈めた。縦にも大きい、横にも大きい。腰掛けたのは、ドラクウに最も近い床几だった。

ロ・ドウルガンは、魔王ではない。かと言ってどこかの魔王に直接出仕している臣下とも違う。自らの才覚のみを頼りに戦場から戦場を渡り歩く、傭兵連隊の主だ。

率いる兵は、二〇〇〇。並の傭兵中隊なら一〇個分に相当するこの大所帯を取り仕切る〈迫撃〉

の口・ドウルガンと言えば、近在で知らぬ者のいない大傭兵隊長だった。

彼は、ドラクウに降ることに迷いを抱かなかった。

今回の式典にも、招かれる前に参加を決めていたほどだ。理由は特にない。強いて挙げれば、傭兵として目指すことのできる最高点に立ってしまっただらう。歳は、三〇を幾つか過ぎた。夢を見るには、何か大きなものと一緒にやっつかねばならない時期だと、自然に悟った。

ドラクウに降ると決めたとき、持っていた財産を全て部下に分け与えることにした。銅貨の一枚に到るまで計量し、不満が出ないように一切を分ける。今まで付いて来てくれた部下と別れるのは惜しかったが、大魔王ドラクウの軍の一翼を担うことになれば、そのまま一つの纏まりではいられないはずだ。だから、口・ドウルガン一人でドラクウのもとに参じるつもりだった。

自分の将才を、試してみたくなったのかも知れない。一軍を率いて降った方がドラクウに重用されることは分かっていたが、自分の我が儘を通してみたくなかったのだ。

分けた財産は、一人あたりでもそれなりものになった。誰もいなくなることを覚悟していたが、去っていったのは最近入隊した数名だけ。後の者は、みんな口・ドウルガンを慕って付いていくことになった。

「余は、アルナハ駐留の軍を率いてパザンの接収に向かい、その後〈シヨナの赤い森〉の北限で〈北の霸王〉ザーディシユの軍に備える。一方、別働隊を東に発し、周辺に威を与えながら大沼沢に到る。ここでは政治交渉によってリザードマンと修好と通商を結び、大魔王の麾下として加える」

〈北の霸王〉という呼称を使ったことに、口・ドウルガンは面白味を感じている。

つまりドラクウは、ザーディシユの正統性を形式上、認めるということだ。実際に持っている戦力の差はともかくとして、ドラクウは大魔王として、四天王筆頭の〈北の霸王〉ザーディシユと対峙する腹積もりなのである。

面白い。やはりこの大魔王を主と仰いで正解だった。

ザーディシユを〈北の霸王〉と呼ぶことだけで、ドラクウは「ザーディシユに刃向う魔王」から、新たな大魔王の正統性を認めないザーディシユを征伐する者へと変貌を遂げたのだ。

「その前に一つ、よろしいでしょうか」

拳手をしたのは妖鳥属の魔王、〈一日千里〉のフィルモウだった。

老練な政治家として知られ、紛糾することの多かった妖鳥属を見事に纏め上げている。ドラクウの祖父、先代大魔王の覚えもめでたく、大魔王府に協力する形で魔界政治に大きな発言力を持っていた実力者だ。

「特にさし許す、フィルモウ。申してみよ」

「はい。お聞きしたいのは、そちらにいらつしやるラ・バナン殿についてです」

嫌な雰囲気だと、口・ドウルガンは思った。抑制の利いた声音の端々に、滴る毒液のように妬みと嫉みが沁み込んでいる。

「畏れ多くも宰相の重任を主上よりお受けされたという話は、臣も伺っております。さらに同時に、〈蛮王〉の位にも就かれるとのこと。誠に慶はしく……」

「フィルモウ、手短にせよ」

「はっ、しからば。ラ・バナン殿にその任を請け負うだけの実力と覚悟が備わっていることは、臣フィルモウにも推察されます。が、新たに主上のもとに整えられる文官の序列もまた、早急に定めねばなるまいと、臣はあえて申し上げる次第でございます」

くだらない政治的駆け引きだ。ロ・ドウルガンにはそうとしか聞こえなかった。

ラ・バナンというゴブリンシャーマンに、権限が集中し過ぎていることを、満座の前で指摘して見せたのだ。大魔王にも諫言できる老臣、という立場を狙っての演出だろう。

確かに、文官を揃える以上は序列も大切になる。そのことは、ロ・ドウルガンにも理解はできた。だが、今この場であるべき話ではない。ここは、大魔王としてのドラクウの権威を発揚することに全てが向けられるべき場であった。

何か言おうとするラ・バナンを、ドラクウが視線で制する。

確かに、ここで糾弾の対象であるラ・バナンが反論をすれば、彼の立場は危うくなる。ドラクウに取り入って権力をほしいままにする君側の奸と映るかもしれない。

「フィルモウ、さすがは祖父にも長く仕えたことのある者の意見だ。聞くべきところは大きい。助言には感謝する」

頭を下げるとき、この巨大な鴉のような魔王が笑みを浮かべるのを、ロ・ドウルガンは見た。

「しかしフィルモウ。重ねて問うが、余を支える新しい大魔王府において、文官たちは何をもってその序列の基準とするべきであろうか」

「畏れ多くも主上。それは、これまでに為してきたことの大きさによるべきでしょう」

「であれば、例えばそうだな……〈白髯〉のダーモルトことダーモルト・デル・アーダが、後に余の幕下に加わったとき、その序列はフィルモウよりも上とするべきか下とするべきか」

「それは……」

答えにくい問いだった。

フィルモウは、先代までの論功を考慮した序列にするべきだという。だがドラクウは、大魔王府を新設する以上、その基準では矛盾が大きいと指摘していた。

「フィルモウの進言、いちいちもつともである。しかし余は、新たに百官を募って大魔王府を開闢する以上、その序列は実力によってのみ判断されるべきだと考える」

「もつともでございます」

追従するフィルモウの声は、先程から一転して弱々しくなった。

「実力を測るには時を要する。よって、今ここでの議論は利薄く、害のみ大きいということは、フィルモウも同意してくれるところであろう。さて、ここで話を変えるが」

満場の来賓たちが息を呑むのが分かった。

たったこれだけのやりとりで、ドラクウはこの場の雰囲気完全に支配している。まるで、フィルモウの諫言さえも仕込みだったのではないかと思える手並みだ。

「余は兵を率いて北方に備える。よって、東の方に向かう者が必要となる」

項垂れていたフィルモウが、顔を上げる。

「フィルモウ。そなたは余の政権の行く末を案じるなど、忠が大きい。よって、リザードマンとの修好の代表者に任ずる」

「はっ、有難き幸せ」

これは拔擢のように見えるが、実のところ試験だ。

以前のように文官の大立者として権力を振るいたいのなら、この話を纏めるだけの手腕を見せろという、ドラクウからフィルモウへの試験だった。

「そのフィルモウの下に付ける副将についてだが……」

「その役目、この俺にお任せいただきたい！」

大きな身体を床几から浮かせ、ほとんど叫ぶような大音声でロ・ドウルガンは立候補した。

ドラクウが微笑む。

ここに、主将フィルモウ。副将ロ・ドウルガンからなる、東方遠征軍が結成された。

× × ×

即位の式典を前に、アルナハがにわかに騒がしくなった。

パザン接收軍と東征軍、二つの軍の出陣が、非公式にだが広まったからだ。出撃は、即位式典の終了からほどなくだという噂も広まり、人と物の動きは目に見えて活発になった。

新大魔王ドラクウ自身が親率するパザン接收軍とは対照的に、東征軍に参加することとなった諸

将は慌しく準備に追われている。式典までそれほど時間が無い以上、兵の呼集や物資の準備に充てられる時間は、常識から考えれば恐ろしく短い。

それでも、東征軍の主将に任じられた妖鳥属の魔王、〈一日千里〉のフィルモウは、自分の領地から一族郎党を呼び寄せるだけでなく、集められるだけの資金を使つて傭兵の雇い入れを進めていた。

ここで功を挙げられなければ、ドラクウ配下の魔王の一人として埋没してしまう。

そのことに対する恐怖が、フィルモウを焦らせている。

「目的は修好と通商だ。軍の数にそれほど拘る必要はないと思うがな」

東征軍副将に任じられたロ・ドウルガンは、アルナハ城外で部下の元傭兵団を並べながら一人ごちた。

宿営として幾つかの天幕を借り受けている。黄麻で織られた天幕は、意外なほど使い勝手がいい。遠征軍にも、馬匹と一緒にこれと同じものがいくつか供与される手筈になっていた。

「副将殿は、戦にならんと見ておられるようじゃな」

声をかけてきたのは、小柄なコボルトの老人だ。クオン・ヴェルバナアス、今回の東征軍に同行する軍監の任にある老将だった。人界との連絡役を仰せつかっていたはずだが、いつの間にか東征軍への従軍を勝手に決めていたらしい。

「さて、戦になるかまではね。どちらにしてもこの軍勢は無意味だと思うが」

「それはどういう意味かな」

「戦にならなければ不要な数だが、リザードマンと事を構えるなら、この数では圧倒的に不足して

いる。それだけのことだ」

リザードマンは独特の死生観に基づいて、絶えず戦争を繰り返している。

それだけに、彼らの兵の練度は異常なまでに高い。個々の武を競う風潮があるが、集団で戦つてもめつぼう強かった。

彼らは、領地の確保や利害関係の調整のために戦うのではない。だから、どこかの勢力が滅亡してしまうということもなく、飽きずに戦争を繰り返している。

その五氏族の戦力が、外部からの侵略に対する盾として立ち上がったとき、フィルモウの嘴が如何に鋭くとも、それを貫くことなどできはしないだろう。

「刃向われればどうにもならんからな。今、主上が動かせる兵力の全てを突っ込んでも怪しいな」

「それなら何故副将に立候補した？」

「厳しい戦いに身を置いてこそ、得られるものがある。違つかい、クオン殿」

「全くじゃな」

クオンが顔をくしゃくしゃにして笑った。こうして見ると随分と愛嬌がある。人付き合いの大事な渡河者としてもかなりの利益を上げていたというのは、噂だけではないのかもしれない。

傭兵は普通、無意識に軍監を嫌う。

軍功を見極めて主に報告する役目を負う軍監は、傭兵にとつて直接の取引相手になるからだ。しかも、上手く付き合うことができれば利益があるが、ほとんどの軍監は傭兵を使い捨ての駒としか見ていない。

酷い連中になると、袖の下の多寡によつて報告の内容を曲げてしまうことさえあった。

だがこのクオンは、他の軍監と違うらしい。身を包んでいるのも、使い込まれた旅装で、軍装としても通用するものだった。

そこでふと気になったのは、クオンが背中に背負っている武器だった。

弓のようだが、ロ・ドウルガンの知る弓の形とは随分違う。

「クオン殿、その背中の中のものは何だ？」

「殿はいい。クオンでな。これは、連弩とかいう武器だ。人界でかつぱらつて来た」

そう言つて慣れた手つきで弦を張ると、矢を番えて近くの樹に試射してみせる。普通の弓と違い、連射もできるようだ。

「大した武器だな。弓と比べてどうだ、クオン」

「扱いが楽だ。新兵でもコツさえ使えば十分に扱える。威力は普通の長弓の方が上だが、使いようによつては便利な代物だよ」

「面白そうだ。数はあるのか？ 俺の隊でも試してみたい」

「いや、人界で回収できたのは三〇かそこらだったからな。儂の部下二〇名に装備させて、後はアルナハの鍛冶屋に同じものが作れんか調べさせておる」

「そいつはいいな。楽しみだ」

軍監が武器を持つということは、この爺様は自分でもいざというときは戦うつもりなのだろう。

ロ・ドウルガンは、ますますこの老人が気に入つた自分につけあつた自分に気付いた。

「クオン、もし今度の戦いで何かあったときは、迷わず俺の隊の方に来い。こいつらは百戦練磨の元傭兵だ。そう簡単には潰走かいそうしない」

「魅力的な誘いだな。儂わしがあと一〇も若ければ、お言葉に甘えていたろう」

「戦場で生き残る方法を探るのは臆病おくびょうじゃないぞ」

「そんなことは分かっている。厄介やっかいにならんとも言っておらん。だが、最初から逃げ道を用意しておくようなことを考えなければならん歳でもなくなつたからな」

リザードマンと交渉をする。

案内役として、即位式典にも出席するリザードマンの五氏族の一つ、家守族の魔王が付いているのだ。話が物別れに終われば、すぐに兵を纏まとめてアルナハに戻ればいい。リザードマンは確かに戦争を好むが、その凶暴性が外部に向くことはほとんどないと言われている。

ただ、それだけの仕事だ。

おそらく、主上もそう考えているに違いないとロ・ドウルガンは思っている。東征軍主将、フィルモウは熟練した文官で、優れた外交官でもあるからだ。

だが、そこにこそ大きな陥穽かんせいがあるような、ねっとりとした纏まとわりつくような予感もある。

「クオン、無事に帰ってきたら、一緒に酒を飲もう」

「ああ、いいとも。こう見えて元商人だからな。少しは蓄たくわえがある。奢おごつてやつても構まわんぞ」

「俺は見ての通り、よく飲むぞ？」

「構まわんぞ。生きて帰ってきたときは、な」

二人の前を、新たな客の一団が通り過ぎていく。

奴隸どれいに伸のびを引ひかしているところを見ると、リザードマンの有力者だろう。

式典は、もうすぐそこに迫せまっていた。